2016.7.23(0)

「パパ／お父さんについて」

2015 年 4 月 18 日(土) 15:00-17:00
ラスチカス　表参道
参加：10 名
司会：セリ沢＆ヤギ林 （文責：セリ沢）

1. 概要：
   ・初参加者一人を迎え、四月ということもあり人間関係について考えてみた。今回は、もっとも身近な人間関係である家族について、とりわけ「パパ／お父さん」に対象を絞った。ママではありません。パパです。

2. テーマ設定：なぜパパ/お父さんなのか？
   1)、一般的に、家庭内における父親の存在感を「パパ」あるいは「お父さん」（それ以外）の両方で受け止めている人は少ない。自身にとっての父親（的ポジション）の存在を呼ぶ呼称はきわめてパーソナルに決定されており、同時期に複数の呼称を使用することは稀である。個々人が使用している呼称に、共通するような背景が見て取ることができるだろうか？
   2)、総称としての「父（父親）」ではいけないのか？　個々の呼称（パパ、お父さん、おやじ、父ちゃん、…）にはあって、総称へと回収された場合に失われる手触り・感触とは何か？　父（父親）と、個別の呼称（パパ、お父さん）とは同じものなのか？　違うのはどこだろうか。
   3)、同様の問いは一般的な家族を構成するすべての存在（母、祖父母、曾祖父母、兄弟姉妹、…）に対しても行いことができる。しかし今回は「パパ／お父さん」に限定する。最近は「女性」や「母親」という背景を積極的にとりあげる哲学カフェも増えてきていることもあり、そうした場で母や女性については主に対話の対象になっていると予想されることもあり、今回のテーマを父を対象とするものにした。

3. 対話[1]：白戸家（TV-CF）の“お父さん犬”
   1)、参加者の中から携帯電話会社の TV コマーシャルに登場する「白戸家」の“お父さん犬”に対する疑問が出された。なぜ犬が“お父さん”と呼ばれているのか？
   2)、TVCF 内の設定ではお父さん犬は、高校生時分は人間であり、家族においても現在は「犬」として認識されている。フィクションではあるが、ある家庭におけるきわめて特徴的な呼称使用“お父さん犬”について対話を重ねた。
   ・一家の大黒柱である「お父さん」は、ペットである「犬」からは最も遠い存在。この愛すべき異物という感じにどんな意味があるのか？
   ・番犬が持つ頼もしさや家を守るというイメージと父親が重ねられているのでは？
   ・大黒柱である父親だけが持つ特徴（ほかの家族は扶養者、庇護者）が、父親の孤独や疎外感につながっているのではないか。ペットも家庭内で独特の存在であり、両者の持つ家庭内の多数派ではないという特殊性が共通点として指摘できるのではないか？
   3)、お父さんが人間から“お父さん犬”に変身したのはいつか？（CF では描かれない空白部分）
   ・子ども二人も成人し、大黒柱としての父親の役割が終了し、犬化したとは考えられないか？
   ・子どもが生まれた時、父“親”になり、この変化が犬への変身になっているのではないか？
   ・父親の権威が軟化し、ほかの家族と同じ位置になって“愛された”時に犬になった？

4. 対話[2]：前項3から哲学対話の問いを立てる
   ・じぶん固有の呼称を持つとはどういうことだろうか？
   ・呼称は親密さの問題とどう接続しているか？
   ・父とパパという複数の呼称を持つ存在である（になる）とは、どういう意味を持つのか？
   ・父親にしかできない固有の役割というのが（本当に）あるのか？　あるとすれば、それは何か？
   ・お父さんへのものと、家族の一員としての犬へのものと、その愛情にどんな違いがあるか？

5. まとめ；
   ・「父親」と「パパ／お父さん」の違い、パパ／お父さんの役割などについて話し合い、参加者の方々から興味深いご意見をたくさん頂きました！（ヤギ林）
   ・前半で“お父さん犬”をモデルに考えたことで解釈を考える展開が多くなり、直接的に問いを深めるのとは違う部分が生まれた功罪はある。後半はパパやお父さんについて話す時にどういう風に考えたら哲学対話になるかについてもあわせて考えてみました。（セリ沢）

以上